

労働者生活の豊かさを求めて：河上肇著「貧乏物語」について

著者	小華和 洋
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	21
ページ	125-141
発行年	1987
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001793/

研究ノート

労働者生活の豊かさを求めて

—— 河上肇著「貧乏物語」について ——

小 華 和 洋

I は じ め に

戦時中は河上肇について殆んどわからず、京大教授でマルクス経済学の大家というのと、大学辞任後共産党に入党し刑務所に入った変った人という程度の認識しかなかった。昭和21年に博士の「経済学大綱」が改造社から刊行されたのをたまたま入手し、上・下巻を一気に読み、経済学とは面白そうだという気がした。ほんとうのところはわかっていなかったのだが。それまでに中山伊知郎著「純粹経済学」、高田保馬著「第2経済学概論」といった近代経済学の書物を読んだがこれこそさっぱりわからなかったのも、これで経済学を勉強してみるのもよいだろうという気になった。皮肉にも経済学を学んでいるうちに近代経済学の方がよいということになってしまった。しかし、現在のようなマルクス経済学は不毛であるといった風潮には賛成出来ず、長所は大いにとり入れていくべきだと思っている。翌22年に岩波文庫から河上の「貧乏物語」が刊行されたので、前述の経過からしてすぐ読んでみたが、これは殆んど感激もしなかった。今日になると河上の代表作といえる「経済学大綱」の下巻、すなわち、「資本主義経済学の史的発展」と「貧乏物語」に関心が高まるようになったのは非常に不思議に思われる。近代経済学を学んだために、まだマルクス経済学者になりきれなかった段階の河上の「貧乏物語」が別の意味で関心をもったのかもしれない。これがここでとりあげた第一の理由である。第二は「貧乏物語」は日本人の書いた経済学の古典の一つといってよいと考えるが、一般的に古典といわれるもの程読まれない傾向が強いし、昭和二けた生まれ以降の人々は経済学を勉強した人でも余り読んでいないであろうからここに紹介してみたのである。第三にわが国の労働者を中心にした生活問題ないし生活史といった面を勉強しており、とくに「貧乏」「下層労働者」とか「不安定労働者」等のその原因についての問題をみていると、河上の「貧乏物語」は外国の資料を中心に書いているが、どうしても先ずとりあげたいと考えるのは当然といえよう。第四に河上肇の学問、思想の著しい変遷について考えてみたいと思った。河上くらいいいゆるブルジョア経済学からマルクス経済学に年数をかけながら序々に移行していったり、人道主義的立場から宗教的思考に、更に共産党の非合法活動まで行うという変化はあまり例がみられないのではないか。読者に大いに読まれた著書を考えが変わるとすぐ絶版にするという例がしばし

ばみられる。変節といつては礼を失するが、学者がその理論なり思想について、ある一定の年齢というか期間をかけてきずきあげたものを屢々変えるというのはどういうことなのか。学生時代に内海庫一郎からお面白いことをきかされた。それは学者の考え方は自分で正しいと思って変えなくとも、その年代なり時期の時代思潮というのが変化し、例えば戦前の時代ではかなり革新的な考えをもっているけれども今日ではもう保守的な考えになるというのである。たしかに50年前に社会保障の充実といった人も今日ではその考え方は現在の保守層でも当然の思想となり、或いはもっと保守的な考え方にすぎなくなる。従ってある期間を経過して学者は学説なり思想を確立したら変化させてはならないのか、その時代なり流れにそって変化していくのか。変化するとしたら、当然何故変化したのかを公表する必要があるのではないか。この問題は河上の問題でもあると考えたからである。第五に河上は昭和3年に京都帝国大学の教授をやめている。その場合の辞職の仕方は妥当であったのかどうか（注1）。大学の自治とは何にかを今日こそ問われなおされる時期にきているのではないか。その一つとして考えたいと思ったのである。参考までに辞職理由書を杉原四郎編「河上肇評論集」から記述しておく。総理大臣にあてた辞職願に添付して総長と学部長に対し別々に提出した辞職理由書である。

〈辞職理由書〉

本日荒木〔寅三郎〕総長は余に対し、(1)マルクス主義講座の広告文にある余の文章の不穏当なること。(2)香川県において選挙の際余のなしたる演説に不穏当なる箇所ありしこと。(3)社会科学研究会会員中より治安を紊乱する者をだせしことの三点を理由とし辞職を勧告せられたり。なお総長は、経済学部教授会の議を経て右の勧告をなすものなることを、特に附言せられたり。余は前記三個の理由を以てして、毫も辞職の必要を認めざるものなれども、即ち教授会の議を経て総長より辞職の勧告を受けたる以上、総長および余の属する学部の意思を尊重すべきものと認め、ここに辞意を決定するに至れるものとす。

昭和3年4月16日 河上 肇 （「京都帝国大学新聞74号 昭和3年4月21日より」）

Ⅱ 河上 肇の生涯

河上は1879年（明治12年）10月20日に山口県岩国で生まれ1946年（昭和21年）1月30日に京都で66歳で亡くなった。この間の約50年は比較的に平穏で過ごしたが約16年は苦しい時代であったといえる。河上の一生は杉原四郎によればつぎの5期の区分される。(1)岩国で育ち、山口高等学校から（卒業間際に文科から法科に転じた）東京帝国大学法科大学に入学・卒業した。山口・東京の勉学の時代。(2)明治35年東大を卒業し大学院に進み、在学中に結婚。「社会主義評論」を連載して後、「無我苑」に入った。この間、東大講師・学習院講師等をしたが多情な10年間を送った時代。(3)京都帝国大学の講師（明治41年）になり、ヨーロッパ留学をして、教授となり1928年4月に大学を辞職した20年間の時代。この間に「祖国を顧みて」「貧乏物語」「社会問題研究」等を出版し、マルクス主義経済学を本格的に研究しその普及に過した時期。(4)実践運動とのかかわりをもって昭和5年に東京に移り、共産党に入党して地下運動を行い、検挙され懲役5年の下獄した時代（政治活動・獄中時期）。(5)刑務所を出て京都の隠棲時代に大別

されよう。第2期には読売新聞に「社会主義評論」を連載し翌年単行本として刊行したが、「無我苑」に入り、河上のいわゆる「絶対的非利己主義」を主張・実践せんとした。明治41年から昭和3年までは京大で講師、助教授、教授と順調に昇進し、研究活動をなし研究業績を多く発表・刊行して代表的な経済学者となった。辞職してから書齋生活より政治の世界に入ったのである。生活した住所からみれば、山口→東京→京都→東京→京都となり、年齢的には幼・少年期→青年期→壮年前期→壮年後期→晩年と区分されよう。思想的にはマルクス主義者以前と以後に分けられるが、河上は明確に移行・展開したのではなく、ゆっくりと時間をかけて変化しているので、中期、過渡期、移行期等にも中間期としてとってもよい。結果的には「貧乏物語」を書いたのを契機にしてマルクス主義の方向に近づいたという点からして「貧乏物語」を中心とする大正4年から7年は注目しなければならない時期といえる。別の考え方からすると河上の生涯を特徴づけるものとして三つの時期がある。大熊信行は三つの奇行としている。これはよくいわれている河上の「求道の人」といわれるところであろう。第一は学生時代の1901年の暮れに足尾鉍毒事件に関する婦人鉍毒救済会主催の演説会が本郷の中央公会堂で開かれた際、会場を出るときに河上は着ていた二重外套、羽織と襟巻を係に渡し、下宿に帰り、着ている以外の衣類を行李につめ、人力車夫に頼みこれを救済会の事務所にとどけた。「篤志な大学生」として新聞にのった。第2は27歳のとき、「千山万水楼主人」というペンネームで読売新聞に「社会主義評論」を連載したが、トルストイや聖書の言葉にうたれ実践に志し、伊藤證信の「無我苑」に入った。連載を中止するとともに、法学士河上肇が書いたものと発表し「絶対的非利己主義」の靈感によったとしている。河上は郷土の大先輩である吉田松陰に私淑し国家主義の気質もあり、マルクス主義経済学を研究し、共産主義への実践活動を行った。年令的・健康状態からしてかゝる活動に入ったのは当時の社会情勢からしても奇行といえはそれにあてはまる。

また河上は歌人として有名であり、同じく京大経済学部の高田保馬も歌人であったのも注目される。つぎに代表的な歌を三つ示しておく。第1は大正13年のものである。第2は昭和7年日本共産党に入党した時、第3は敗戦の日、20年8月のものである。

- (1) 旅の塵はらいもあえぬ我ながら また新たな旅に立つなか
- (2) たどりつきふりかえりみれば山川を 越えては越えてきつるものかな
- (3) あなうれしとにもかくにも生きのびて 戦(たたかい) やめるけふの日にあふ

Ⅲ 「貧乏物語」の出版について

河上の代表作の一つをあげよといわれれば多くの人は「貧乏物語」を示すであろう。河上は教育者、研究者とジャーナリストという文筆活動の三つの面を持っていた。大正2年10月から大正4年2月末まで外国に留学し、大正6年に「貧乏物語」を出版し、まさに洛陽の紙価をたかめたといわれる位よく売れた。この書物は弘文堂(京都)より出版され、弘文堂からはこれを契機として個人雑誌「社会問題研究」等を出版している。「貧乏物語」の第1版奥付には大

正6年2月25日印刷，大正6年3月1日発行。実価金九拾五銭。発行所合資会社弘文堂書房となっている。大正6年3月1日に初版が発売，3月10日再版，3版は3月20日と10日ごとに版を出すという売れ方であった。末川博によれば100版売れたといわれたそうだが，脇村義太郎によると彼が調べたところ30版しか出ておらず100版というのは伝説だという。以下，脇村義太郎の論文を紹介する。当時は普通1版が500部で30版うれたとすれば1万5千部売れたことになる。私が大正7年に買おうとしても新本はもう買えなかったという。1版1版10日毎に刷って出したかは疑わしく初めから2千なり3千刷って，500部ずつ版をかえていたのではないか。また版についても数を飛ばしているかもしれぬ。当時は25版から30版ととぶということもあったのではないか。装幀は舎弟の河上左京がした。装幀は3種類で異ったものである。河上の依頼で左京が何枚か書いて順次使用したので深い意味はなく，左京は水彩画を画き二科に出品されていた。「貧乏物語」の装幀は水彩画よりも本格的な油絵画家の手になるものではないかという感じがするとしている。当時の社会科学，人文科学の書物の装幀としては非常に新鮮なもので，小説かなにかならばともかく，ノンフィクションの書物の装幀としては思いきったもので，この書物の売れた一つの原因は，この装幀にあったのではなかろうかとさえ私は感じているとしている。大正時代にこの本を読んで経済学の研究に入った人々が多いといわれているが1万5千部売れたのは装幀の原因を含めて多かったといえるのかが関心のあるところであろう。

Ⅳ 「貧乏物語」出版の時代的背景

この物語の形成された時代的背景は河上の海外留学と第1次世界大戦による世相である。大戦（1914～18年）によりわが国は世界の工場の代りをなし今までにない好景気にうるおった。「鉄成金」「船成金」という「成金」という言葉にみられるように，にわか成金がみられる。北海道でも「豆成金」等があらわれた。当時の「成金」達の贅沢な生活ぶりはいろいろ紹介されているので省略するが，資本家のみならず，戦争景気で労働者でも熟練工といわれる一部の人達の賃金は上昇していた。従って好景気のもとで物価騰貴，インフレ状態を呈し，いわゆる「金持」と「貧乏人」との格差が大きく，著しいものがみられた。わが国の経済は軽工業から重化学工業へと産業構造が一変し資本主義経済が確立し独占資本主義といえる状況であった。かゝる進行の過程で国内外ではロシア革命，デモクラシー思想の導入（民本主義），米騒動へと動いていった。

Ⅴ 「貧乏物語」から「第二貧乏物語」に

「第2貧乏物語」（注2）の第1回のまえおきでこの本の内容をまず述べているが，それによると，これは一般的な読者を相手に社会問題に関する読物を書くのは，私の生涯ではこれが三度目だとし，第1は「社会主義評論」で大学卒業後3年目，1905年秋から読売新聞に連載したもので当時は日露戦争が終わったばかりであり，1905年にはロシア革命が行われた。「貧乏

物語」は第2の「社会主義評論」であり第1を書いてから1916年9月より大阪朝日新聞に連載したものである。第1次大戦の最中で1917年にはロシアでプロレタリアの革命が行われた歴史的にも注目すべき年となった。「貧乏物語」から12年を経た第3の「社会主義評論」が「第2貧乏物語」で「改造」の誌上に連載した。従って河上はかゝる読物を書いたときはいつでも戦争が生じていた。それは意識してはいなかったであろう。

「社会主義評論」は明治39年1月30日に読売新聞社より発行され「千山万水楼主人」という署名で出された。河上は最初にかゝるペンネームを使用したのは、自分が執筆者であるということが世間に知れては困るといっている。何故困るかということを一言でいうと「我利」のためによくないという。出来ることなら今後は文部省の留学生にもなろう、大学教授にもなろう、博士にもなろうというためには、社会主義に同情したり、政府の政策を非難したり、先輩の悪口をいったりするのは、不得策である位は僕も知っていたとしている。それで匿名を使い、東京にいて房州にいる振りをしたり、病気でもないのに不治の病があるといったり、九州に行ったことさえないのに欧米を漫遊したとした。

第36信で河上はいう。『「千山万水楼主人」の虚名広く湖湖に喧伝せらるるに至りしは、実に余が予想の外に出でたり。然れども今日に至って之を見る、真に一場の戯語に過ぎず、寧ろ笑ふべき至りなり。乃ち正に本日をも以て筆を擱かんと。戯言たるに至りしや、他なし、昨の余は今の余に非らされば也。何が故に昨の余は今の余に非らざるや、他なし、昨の余は尋常一般の人たりしも、今の余は既に絶対最高の真理を悟るに至りたれば也。』河上の今日にいたりし事情を述べ最後に「明治38年12月7日夜11時、千山万水楼主人実は法学士河上肇謹んで茲に擱筆す、終りに臨みて足立北鷗先生が此の評論の爲めに多大の助筆と示教とを与へられしを謝し、且つ久しく先輩知人及天下の読者を詐りし罪を謝す」と結んでいる。つぎに第2として「貧乏物語」となるが、筆者は第3として「社会問題管見」をとりあげるべきだと思う。これは大正7年9月10日に弘文堂書房より刊行された。内容は新聞雑誌に公表した短文若干をまとめたもので12の論文の外は、概ね専門外の一般的読者を相手とする通俗の随筆であるとしている。本職である経済学について専門的大著述を志ささないのかといわれると、恥ぢて答ふる所を知らざるべしと「題言」で述べている。この「社会問題管見」の中には「貧乏物語」の下編については全くとり除かれている。

第4として「第2貧乏物語」がある。これは「改造」12巻11号（昭和5年11月1日別冊附録）として発行され、46判序2頁、目次4頁、本文504頁、紙装、定価は30銭（本誌とも80銭）であった。本文は「改造」の昭和4年3～11月号、昭和5年1、2、5、6各月号。附録1は「社会問題研究102」（昭和5年5月1日、104（7月1日）、106（10月5日）の各冊、附録2は「社会問題研究」105、106冊。「第2貧乏物語」の表題は河上自身では気にいらなかったが「商売人のいふがままにした」という書翰があり、改造社側は河上の文名の高からしめたかつての著作にあやかりとしたのであろう。内容的には「貧乏物語」とは異なり、弁証法的唯物論、唯物史観、剰余価値説の解説をしたマルクス主義の入門書的なものである。大河内一男は「文章

も至極平板な解説風のものだし、また博士の思考過程にも労苦と動揺とが全くなく『貧乏物語』に比し面白くもないし、読者に訴える力に乏しい」としている。検閲に対する出版者の顧慮から、所々に伏字がしてある。附録の第2はスターリンの報告演説でこれは非常な価値をもつものとしてつぎのように述べている。「やくざな本書の刊行も、かかる附録のためにその意義をもちうるであろうことは筆者の慰めとするところである」としている。その内容は省略する。

Ⅵ 河上 肇についての人物像 （「貧乏物語」前後の河上についてみたもの）

1) 「河上肇と無我苑」 伊藤證信 （ここでは殆んど各筆者の書いたものを示した）

伊藤證信は河上について「河上さんは明治38年12月2日に私の返事をみて、4日午後始めて大日堂に来訪、爾後『無我愛』の伝道に一身を献ぐべきことを誓われ、5日に東大をはじめ5つの学校に辞職願を出し、8日に再び来苑されたが、その日歸寓の後、早くも無我苑から独立して伝道の事に従う計画を爲すに至った。」その理由を『思い出』にはつぎのように述べている。「蓋しかの無我愛同朋が、自ら全力を献げて他を愛するを趣旨としながら、其の行動深く余を感動せしむるもの無く、殊に其の夜間睡眠を貪る如きは、未だ全力を献げざるの徴なるべしと認めたるに由る也。故に余は9日に至って、全く無我苑より独立し、而して余自らは爾今寝わず休まずして、此真理を伝へ、使用に耐え得る限りに於て、此の五尺の瘦軀を使用し盡し、死して後已まんのみと覚悟したり」「寝ねず休まず」などと云ふ生活を続けようものなら、間もなく斃れるに決まっていた。しかし私は断乎としてさうした生活に突き入ろうと決意した。私は死を考へたのでは無い。死に直面したのだ。これは瀕死の病人といへどもなお爲し能はざる所のものである。それは禅家に請ふ大死一番なるものに相当する。私は小我を滅却することによって、物心の対立を超越し、心を心で見ることが出来たのだ。その瞬間こそ即ち我が謂ふところの宗教的真理を把握した瞬間なのである」と書いている。「彼は12月13日に本郷湯島に一家を構え、行道の根拠地とせられたが……（略）……、翌39年1月4日から大日堂の附近の無我苑第3分苑に、他の同朋と共に居住し、無我愛誌に毎号執筆し、（略）。」

それより二ヶ月余り河上さんは全く無我苑の同朋となって、無我愛運動を共にされたが、偶ま無我苑そのものに一大危機が巡り来って、明治39年2月25日限り、一時苑を閉鎖し、雑誌の発行を始めとし、一切の伝道行爲を中止することとなった。その理由は、結局我々同朋の信仰生活上、必然逢着すべき一つの径路であって、ここに簡単に述べ難いとされている。今から当時の無我苑生活を反省してみると、河上さんに叛旗を翻へされても致方の無いような一面が無かったとはいへないとして「しかし、かかる破綻の何時かは起るべき無我苑同朋の欠陥をば、河上氏はその鋭敏なる感覚を以て、初対面の時から、それとなくすでに直感してゐられたと云ふことは出来るのであらう。」といっている。（「河上肇博士と宗教」伊藤證信著から抜萃）

2) 「河上博士の踏みつつある道」 小泉信三

小泉は「河上博士の述作の凡てを通じて常にその読者を打つものは博士の情熱と理想主義とである。別の言葉でいへば今も失われぬ博士の至純な青年の心である。」「博士の理想主義は旧

経済学の根柢をなしている利己心是認、営利主義是認及び必しも経済学の本質に伴うものではないけれどもしかもその屢々陥らんとする物質主義を許すことが出来ないのである。経済学の利己心営利主義是認に反抗して起ったものに社会主義経済学がある。河上博士は必ず社会主義経済学の中に多くの望ましいものを発見されるに違いない」「私の見る所によれば河上博士は三つの物の調和統一に苦心して居られる様である。三つというのは経済学と社会主義と及び博士に天賦の理想主義とが是である、何如にして此の三つを調和するか。之を三つながら調和する方法があるか、或は其中の一、若しくは二つを棄てなければならぬか。是に対する最終的の解答はまだ与へられて居ない（様である）。思ふに同時に此の三つの物を持たなければならぬ事が不幸でもあり幸でもある」「『貧乏物語』において博士の理想主義は同じく博士の持つてゐる他の傾向を圧倒して甚だ解明であつた」「河上博士は果たしてマルクスの立つて居る地点まで到達せられるか。それとも其の手前の何処かで停まられるか。それは悉く未決の問題である。』（「中央公論」大正8年3月号より）

3) 「石川（三四郎）型の社会主義者」 堺 利彦

「私はさきに河上君の『社会問題管見』を評してこんな事をいった。博士がマルクスに傾倒すること甚だ深く、従つて其の言議が社会主義的色彩を帯ぶること甚だ多く、然しながら又その道徳的、宗教的、倫理的なる感情と態度との爲、微温不徹底なる結論に到達するを免れぬ事は『貧乏物語』に於ひて既に明瞭に現はれてゐるが、本書に於ても依然として其の同じ強点と弱点とが錯綜して現はれてゐる。（略）」「博士は義憤を有する学者に相違ない。只その義憤を力に依つて発露させるだけの決意がなく、寧ろ涙を以て自ら慰め人を動かさうとしている。博士の義憤には道徳的情緒が余りに多く、反抗的気象が余りに少い。（略）」「然し私はまだ此人が今後何かの障礙にブツかつた時を氣遣ふ事を禁じ得ない。「読売の『社会主義評論』の中途から無我苑に投じある歴史を、更に繰返す様な事がありはしまいか。無ければよいがと案じている」「河上君を批判すると、一言どうしても福田徳三君の事が云ひたくなる。私の頭の中では絶えず此の二人物を一對にして考へる癖がついてゐる。思想上の態度の明白な事から云へば、河上君は福田君に比して一層大胆である。然し宗教的道徳的迷妄を脱却した点から云へば、福田君は河上君に比して遙かに徹底してゐる。又一個の人物として見る時、温厚誠実なるらしき河上君は、野次性反抗性の多量なる快男子福田君に比して、到底及ぶ所でない。又其の代り、福田君にはズルイ所があつて、そこは河上君のマジメと比べ物にはならない。然し河上君のマジメが果して大なる効果を挙げ得るかも問題であり、福田君のズルサが存外おもしろい芝居を打つまいにも限らぬ」とうまい批評をしている。（「中央公論」大正8年3月号より）

4) 「河上君の私的生活」 法学博士 河津 暹

「私の河上君について感じて居る事を卒直に申し上げて見ると、一言にして云へば同君は我國の経済学者の中では最も天才であるといふ事です。その天才的であるといふ事は、いろいろにも解釈が出来ますが、私の見る所では、或る問題を提へて研究を初めるといふと、殆ど凡ての物を顧みないで、まっしぐらに其研究に没頭して、ある処まで或はある物を得るまで

行かなければ已まないといふ強味を有って居る人である。その凡ての物を顧みないで目指す目的物に突進して行くといふ勇猛心、又其目的に突進して行くに当って、其才華が煥発して殆ど普通の人の考へ及ばないような発見等を爲す事が出来るといふ点に於て、確かに天才であると思ふのであります。河上君に接した人は誰でも知っている事であるが、動作は極めて丁寧な人で、会談に於ても亦極めて穏かな人であります。然るに一度筆を執るといふと別人の如き勇者になる事が出来る。(略)」「又一面から云ふと、其時に考へて居る事を卒直に言ふから、後にいろいろ思ひを潜め工夫を凝して、其説が謬って居る事を悟ったならば、前の説をば捨てる事弊履の如く、従って改論変説は、悪い意味に於てでなく、甚だ多くあるようである。之が一步一步同君の研究の進境を語って居るものと云ふ事が出来る。此の点が同君の長所であると云へるが、又短所であるとも私は云へると思う。ですから同君は思を潜めて書斎裡に研究する方が得意がある方で、従って其の研究の得意の方面を云へば、経済学思想を取扱ふか、之を除いては今度創められたような労働問題の研究の如き、謂はば、思想考案——ロジックを追駈けて行く方面に得意がある。」「尚は最後に同君は人格の極めて崇高な、真面目な人であって、家庭も又極めて円満である。その家庭で円満であるのについては、吾々は是非同君の細君に敬服の言葉を捧げなければならぬ。此天才肌の同君が後顧の憂なく其境地を拓いて行けるのは、細君の内助の功が与って大に力があるのであると信ずる。」「(「中央公論」大正8年3月号より)最後に述べているのはうなづけられるが、とくに入獄されている時期にはなるほどと思はせるところがある。

5)「僕の見た河上君」 法学博士 吉野作造

「最初逢った頃の僕の印象を今から追懐してみると、君はよく疑う人であった。どんな問題でも、先づ一旦は疑った上でなければ承認しないという風な人であった。従って又よく考へる人であった。然しながら根が精密に物事を刻んで考へるといふよりも、何れかといへば、よく疑いよく考ふという態度の人としては余りに直感力に富んだといふ風に僕には考へられて居った。」「同君は物を書くといふ事に特別趣味を有って居たと思はる。文章も初めからなかなか達者であった。温潤の中に辛辣を包み、謙遜のやうでなかなか思ひ切った無遠慮な所がある」

「前の経済学が誤りで後の経済学が正しいといふのでは無い。(筆者注。無我愛の洗礼を受けた後の経済学をさすのであろう)前の経済学は謂はば本の10冊も読めば誰でも説ける経済学である。後の経済学は河上君でなければ説けない。又河上君にして初めて説き得る経済学である。其議論の中には温い血が流れている。(略)僕は君に於ては少し趣きは違うが、サン・シモンを憶い出さざるを得ない。」「同君は愈々社会問題の解決を提げて起たんとすとの事であるが、これは実に同君にとって極めて適当な事業である。適材適所とは此事を措いて外に無い。併し乍ら同君を僕が適材と見る所以は、社会問題に関する研其該博豊富な学殖よりも、河上博士の人格其物が自ら一個の社会問題の解決の精神である点にある。」「(「中央公論」大正8年3月号、「社会問題研究の為に起る河上博士論」より)

6) 東畑精一の河上論

「高校の3ヵ年間、よく遊んだが、またよく読書もした。当時は「哲学時代」の入り口、またいわゆる「岩波文化」の始まりであった。(略)ひとたび社会科学となると河上肇さんの『貧乏物語』を逸するわけにはいかない。およそあのころの高校生でこの書を見すごしたものは少ないであろう。日本の貧乏、いな貧富の懸隔の存在に開眼してくれた書物である。大正デモクラシー思想の一角を占めた書物である」「わたしが高等学校にいた大正5年から8年にかけての時期は、まさに日本の激動期であった。国内経済は大いに展開した。また国外からあらゆる思想が堰を切った水のように国内に浸透した。これらの根本にあるのが第1次世界戦争であった。(略)どうも人間は急に富み大金を手にとると、平常心を失い、半ば気が狂ったようになる。米価が高くなって収入がふえたとして、せっかくよい歯を抜いてギラギラした金歯に代たという手合いも出てくる」「米騒動の研究は別にして、一介の書生たるわたしも相当に強いショックを受けた。今まであまり考えもしなかった『大衆』というものの実在を知ったことであった。またそれは巨大なエネルギーを担うものであることを知った。社会科学とはこういう存在を研究するものだと考えたことである。」(東畑精一著「私の履歴書」より)

7) 大河内一男の「貧乏物語」

「河上肇の名は、その後東山の真如堂に眠ることになった博士の霊とともに、当時の三高や京都大学の学生にとってはごく身近い存在でしたし、また京都の市民の方々にとっても敬愛の対象でした。」(略)「大戦中の大正5年、「大阪朝日」に隨想の筆をとりはじめました。題は『貧乏物語』でした。戦争景気で浮わつた世想のなかで、また「成金」たちが有頂天の振舞いに明け暮れているその最中に、なんとしたことか、「貧乏物語」という、人の意表を衝いた題の隨想が大新聞に連載されはじめたのですから、誰もがアッと声をあげたのも当然でしたでしょう。(略)たいへん格調の高い、古武士風の文体であります。博士がこの一文に託して訴えようとしたのは、英米その他の先進諸国は、経済はおおいに発展膨張したようにみえるが、半面では、貧乏人がおどろくほど累積している。富裕とか経済の膨張とかという半面は、必ず庶民の貧乏である。(略)私などには、博士のその後の著作や主張よりも、貧乏物語のなかの博士のひたむきな道義論の方に惹きつけられるところが多いのです。(略)いずれにしても『貧乏物語』が若い日本人にもものを見る眼、考える頭をよびましたことは疑えないと思います。」(略)河上博士は『貧乏物語』のなかで、富者の「心構え」の一新を訴え、そのためにはよほどの「豪傑」が登場しなければ駄目だと書いていますが、その「豪傑」がどんなものであるかを具体的にみせてくれたのが「米騒動」だったとも申せます』(大河内一男著「暗い谷間の自伝」より)

VII 「貧乏物語」の概要

ここでは「貧乏物語」の第30版を底本とした岩波書店刊行の河上肇全集第9巻によった。ここでは河上の言葉で示した方がよいと思って書いている。序においては河上は「過去十数年間私はいろいろな物を書いたけれども、此論文はと纏ったものは無い。自分では之が今日迄の最

上の著作だと思う」といい、「人はパンのみにて生くものに非ず、されど又パンなくして人は生くものに非ずというが、此物語の全体を貫く著者の精神の一つである」とする。経済問題が人生問題の一部となり、又経済学が真に学ぶに足る学問となるのもこれがためだとしている。孔子の立場を奉じて富と貧を論じたつもりとして東洋的な立場も論じている。「一部の経済学者は所謂物質文明の進歩（富の増殖）のみを以て文明の尺度とする傾があるが、余は出来得るだけ多数の人が道を聞くに至る事を以てのみ、真実の意味での文明の進歩を信ずる」としている。富は人生の目的——道を開くという人生唯一の目的、只その目的を達する為の手段としてのみ意義あるに過ぎないとしている。なお、この物語には3枚の画像をのせている。アダム・スミス、カール・マルクスとロイド・ジョージの3人の肖像である。本文は、如何に多数の人が貧乏して居る乎（上篇）。何故に多数の人が貧乏して居る乎（中篇）。如何にして貧乏を根治し得べき乎（下篇）の三篇と、附録としてロイド・ジョージより構成されている。まづ上篇の内容をみてみよう。上篇の最初にはつぎの有名な文章よりはじまっている。「驚くべきは現在の文明国に於ける多数人の貧乏である。一昨々年（1913年）公にされたアダムス氏の『社会革命の理』を見ると、近々の中に社会には大革命が起って、1930年、即ちことしから算へて14年目の1930年を待たずして、現時の社会組織は根本的に顛覆して仕舞ふと云ふことが述べてあるが、今日の日本に居て斯かる言を聞く時は、吾々は如何にも不祥不吉な言分のように思ふ。併し翻って欧米の社会を観ると、冷静なる学究の口から斯かる過激な議論が出るのも、必ずしも無理では無いと思はるる事情がある。英米独仏其他の諸邦、国は著しく富めるも、民は甚しく貧し。げに驚くべきは是等文明国に於ける多数の貧乏である」。1930年はまさに1929年に世界大恐慌が生じた年であるだけに興味深いところである。まず多数の貧民の存在を示すためには貧民とは何かを説明している。貧乏人を三つに区分し、第一の貧乏人とは金持に対していう貧乏人で比較の意味で用いている。第二は英語の Pauper 被救恤者の意味で人の慈善に依頼して生活を維持している者である。第三は経済学上の特定の意味を有する貧乏人で、貧乏線以下の者をいう。河上は人間にとって大切なのは三つあるとしている。第一は肉体（ボディ）、第二智能（マインド）、第三靈魂（スピリット）であるとし、人間の理想的生活は、これら三つのもを健全に維持し発育させていくことである。必要なだけの物資を得ていない者は貧乏人というとしている。肉体の自然的発達を維持するに足るだけの物を吾々の生存に必要な物とし、それだけの物を持たぬ者を貧乏人としていくとする。西洋では肉体を維持する最も必要な食物であるが、大人男子で普通労働をする者は1日3500 Cal の食物をとればよいとし、ローンツリー氏の貧民調査等はこれを標準としている。西洋と日本では気候風土、人種体質も異なるので一概には定められぬが1日3500 Cal の食物摂取をすればよいというのが学者間と定説とみ、労働時間の長短と所要熱量に影響するとしている。1人前の生活に必要な食物量が決まれば如何程の費用が要するかを見れば価格により食費の1日の最低費用が計算出来る。食費の外に被服費、住居費、燃料費、雑費を算出すれば、1人前の生活必要費の最下限がみられる。これから貧乏線が描けるし、これが貧富の標準となるとしている。この線以下に下れる者——生活

必需品の最下限に達する迄の所得さへ有していない者——は貧乏人とし、この線以上の所得を有する者は非貧乏と看做すとする。貧乏線上にある者は貧乏人とする。第1級の貧乏人とは貧乏線以下に落ちている人々で、第2級の貧乏人は正に貧乏線の真上に乗っている人々で第1・第2級の貧乏人こそ、この物語の主題とする貧乏人だとする。以上を要約すると貧乏には3種の意味があるとし、第1の意味は金持に対していう貧乏でその要素は「経済上の不平等」である。第2は救恤を受けているという貧乏で「経済上の依頼」である。第3の貧乏は生活の必要物を享受していないとの意味で「経済上の不足」だとする。この第3が貧乏人の標準であり、これにより文明諸国で貧乏人はどれ位あるかを示そうとする。1899年、ローンツウリーがヨーク市で調査した結果、肉体の健康を維持するだけの所得のないのが、全市人口の30%近くあり、チャールス・ブースがロンドン市を対象とした1891年の調査では、総人口を100とすれば、最下層民0.9%、細民7.5%、貧民22.3%で30.7%が貧乏人であった。多数の貧乏人の生ずる根本原因でなくその表面にみられている直接原因としてはローンツウリーのヨーク市調査は、主たる稼人が毎日規則正しく働いていながら其賃金が少いのが51.9%、家族数が多い22.1%、主たる稼人の疾病又は老衰のため5.1%、就業の不規則のため2.8%、稼人が無職2.3%で賃金が少いために貧乏線以下の50%以上となる。その他アメリカ等の例も多く述べているがここでは省略する。

英国で1902年に陸軍少将フレデリック・モーリスが論文を発表し、英国陸軍の志願者は段々体格が悪くなり5人のうち2人が合格するにすぎぬとし、これは今日国家死活の問題とし、陸軍軍人の大部分を供給する階級の人々の体格がこのような悪化しているのはどういう意味か、その原因は何かを論じた。多くの識者の注意をうながしたが、第1に問題にされたのが、学校の体育に何か不十分な点があるのではないかとした。調査の結果は、少くとも小学教育で全く児童の食事が足りていない点にあることがわかった。エンデインバラ市は児童の約30%が栄養不足であるとした。いくら教育を普及しても先ずパンを普及させねば駄目だと河上はいつている。1906年英国で「食事公給条例」が成立した。この条例は貧乏な小学校児童に公の費用で食事を給与するという法律である。ウイルソン氏は原案賛成演説で「人或は、斯かる事業は宜しく之を私人の慈善事業に委すべしと主張するかも知れないが、私は此の大切な事業を私人の慈善事業に一任せしことすでに長きに失したと考へる者である。私は満場の諸君が、人道及び基督教の名に於いて此案を可決されん事を希望する」と述べた。英国は each for himself（各彼れ自らに向って）の国であるが、今英国で子供の養育という家庭の自治に一任しおくべきような問題に国家が立ち入り、公共の費用で之を賄って行くことにしたのは、英国の政治家が貧乏は国家の大病であることを痛切に認めた証拠だといはねばならぬとしている。日本ではこのようなことを私人の慈善事業として人々の注意を惹くに至らないのを遺憾とする者と述べている。貧民の児童に食事の給与を試験的に行った成績等を記述しているが省略する。英国の社会政策の一端として食事公給条例や養老年金条例を述べ、これらの施設は少からざる経費を必要とするものである。従って英国の財政が急に膨張せざるを得なくなった。ロイド・ジョージが

歴史的な大演説をしたがその一説に「私は吾々が生きているうちに、社会が一大進歩を保って、貧乏と不幸、及び必ずこれに伴って生ずる所の人間の墮落ということが、嘗て森に棲んでいた狼の如く、全くの斯邦の人民から追ひ去られてしまふというが如き、悦ばしき時節を迎ふるに至らんことを望み且つ信ぜざらんとするも能はざるものである」といっている。以上が上篇であり中篇は3篇の中で最も短い。本文115頁のうち19頁である。中篇の内容は貧乏という社会の大病の根本原因がどこにあるかを明確にしようとしている。エドキン・キャンナンが『富』の序に「経済学の真の根本問題は吾々凡てが、全体として、今日の如き善い暮らしをしているのは其は何故である乎ということと、吾々の中或者は平均より遙かに善い暮らしをして居り、他の者は遙かに悪い暮らしをしているのは何故である乎といふことと、この二つである」としている。人間が他の動物と比し経済的発達をとげた根本原因は、道具の発明にあるとすれば、近代に至り機械の出現となったのは経済史上の一大事件である。機械の効果は偉大であり、ゼームス・ワットは機械時代の先駆者の一人であることをすれば、彼の名は人間社会にとって永遠に伝うべきである。機械の発明により、生産力の著しい増加がみられた。生産力が増加したのにもかかわらず貧乏人の数が非常に多いのは如何にも不思議である。此の問題に関して貧乏根治の方策を立てたいが、この問題についてマルサスの「人口論」での認識は仮に人間全体が貧乏しなければならぬという説明であるとしても、同じ人間に貧富の人がいることは全く説明し得ざることとしている。これは不思議ではなく、有力な機械は出来たが、その生産が今日では全く抑へられてをり、十分の其の力を働かせずにいる。日常の生活に必要な生活必要品の生産が著しく不足しているこの点を誤解して機械の出現により生活必需品は豊富に造り出されているが、其の分配が悪いために、少数の人の手に余分に捕られ、そのために多数の人々は食うにも食はずに困っているというが、これは大きな間違いである。其の分配の仕方が悪いためではなく、初めから生活必需品は十分に生産されていないのである。都会に出てみると店頭の様々の贅沢物や奢侈品がならべられてあるかという、実はそこには今日の経済組織の根本的欠点がある。今日の経済社会は、需要ある物に限りこれを供給するということを原則としている。需要は單に要求というのと同じでは無く、一定の要求に資力が伴って始めてそれが需要となる。生活必需品に対する需要よりも奢侈贅沢品に対する需要の方が、何時でも遙かに強大優勢である。生活必需品に対する吾々の需要とは自ら一定の制限がある。実際の社会は極めて複雑だが、要するに今日の経済組織のもとでは、物を造り出すことは私人の金儲仕事に一任してあるから、金を出す人さえあればどんな無用な又有害な奢侈贅沢品でも製造されると同時に、若し十分に金を出して買得る人が多勢いなければ、いかに国民の全体又は大多数にとって極めて大切な品物も、それが遺憾なく生産されるという訳にはいかない。ダイヤモンドの世界産額のうち95%はキンバレー礦より産出されているが、礦脈は頗る豊富で掘り出せばいくらでも生産されるが、沢山売り出すと価格が下落して利潤が減るから生産を制限している。南阿のダイヤモンド生産は一会社の独占であり生産制限がとくに目立って行われている。外国の例ではなく我が国で行はれた米価調節がそれである。多数貧民の需要に供すべき生活の必需品は、少し余分に造ると、

直に相場が下がって儲けが減るから、態と其生産力を抑える。余の見るところでは、之が今日文明諸国において多数の人々の貧乏に苦しみつつある経済組織上の主要要因である。つまり、この議論はいつのまにか循環したやうである。今日何故貧乏人が多いかといえば、其は生活必要品の生産が足らぬから、欲しいと思っている人が沢山あっても、其人達が十分な資力をもっていないからだ（貧乏だから）。貧乏人は何故多いかとなって循環する。貧乏問題は一見すれば分配論に局限された問題の如くにして、実は生産問題と密接な関係をもっている。社会問題は單純に富の分配の問題とし、生産組織との連絡するのを看過する者が多いのである。

つぎに「如何にして貧乏を根治し得べき乎（下編）についてみよう。社会の大病たる貧乏を根治する根本策を述べる前に中編を要約すると、(1) 現時の経済組織にして維持せらるる限り。(2) 社会に甚だしき貧富の懸隔が存する限り。(3) 富者が其の余裕あるに任せて妄りに各種の奢侈贅沢品を購売し需要する限り。以上の状態では貧乏を根絶することは到底望がないとしている。従つてこの社会から貧乏を根絶するとすればつぎの方策をたよるより仕方がない。(1) 世の富者が若し自ら進んで一切の奢侈贅沢を廃止するに至るならば、貧乏存在の3つの条件のうちその一つを欠くにいたるので、其はたしかに貧乏根治の一策である。(2) 何等かの方法を以つて貧富の懸隔の甚しきを匡正し、社会一般人の所得をして著しき等差なからしむることを得るならば、これまた貧乏存在の一条件を絶つ所以なるが故に、其も貧乏退治の一策と為し得る。(3) 今日の如く各種の生産事業を私人の金儲仕事に一任しておくことなく、例へば軍備又は教育の如く、国家自ら之を担当するに至るならば、現時の経済組織は之がため著しく改造せらるる訳であるが、これも貧乏存在の一条件を無くする所以であつて、貧乏退治の一策として自ら人の考へ到る所である。理論上以上の三策に対しほぼ同一の価値をくだせるが、實際どれをとるかは自ら別に周密なる思慮を加える必要があるとする。英国で育つた経済学の根底には現在の経済組織下における利己心の作用をもつて経済社会進歩の根本動力とし、利己心の最も自由な活動をもつて、社会公共の最大福利を増進する所以の最善の手段であるとする自由放任、個人主義を原則とするのが、英国正統学派の宗旨とする。多少でも国家の保護干渉を是認し、利己心の自由なる発動に何等かの制御を加へんとする国家主義、社会政策のごときは、これを正統学派よりみれば何れも皆異端である。今の世の中の組織は金のある者にとっては、まことに便利至極である。しかし金の無い者にはこれほど不便至極の仕組みはない。個人の私益と社会の公益とが常に調和一致するという正統経済学派の思想の泉源は18世紀の初頭とみられる。1714年マンダヴィルが『不平を鳴らす蜂の群—蜜蜂物語』を刊行した。一名「個人の罪惡は即ち公共の利益なり」としているごとく、この考え方は利己心是認論で其の後ヒューム、ハチソン等の倫理学者の手を経て、アダム・スミスに伝えられた。彼は各個人が各自の利益を追求することを是認し、自然のままに放任することにより社会が繁栄し、最大多数の幸福を実現するとした。経済上の自然主義、楽天主義、自由主義、個人主義、自由競争主義等、英国正統経済学派の特徴とみなす色彩は多くは以上の根底により発したものである。保護主義干渉に反対し自由放任を主張した。現代経済組織の下において個人主義のもたらした最大弊害は多数人の貧

困である。そこに経済組織改造論が出てくる。重要な事業を大部分官業に移つし直接に国家の力を以てこれを経営していく。軍備、教育の制度と同じ主義、即ち個人主義に対して仮にこれを経済上の国家主義という。個人主義に対して社会主義といつてもよいだろう。しかしわが国では一種特別の危険思想を有する者により唱道されたので国家主義というとしている。個人主義、民業主義に対し合同主義、官業主義を指すとしてよい。例としてドイツが経済上の経営で国家主義を実行しパンの原料を国有として国民の1人1日の消費量をきめている。パン切符の配付を受け切符がなければ何人もパンを口にすることが出来ない。「思ふに収穫の時期は已に来れり。アダム・スミスに依りてうまれたる個人主義の経済学は既にその使命を終へて、今は正に新なる経済学の生れ出づべき時である。看よ、世界の機運の滔々として移り行くことを」。一国の生産力を出来だけ有効に使用しようとするれば従来の経済組織は自から改造されていかねばならぬわが国の現在は、貧富の懸隔は決して西洋諸国のように甚しくないから今のうちに十二分に考慮せねばならぬといっている。しからば根本問題として経済組織の改造を貧乏退治の最根本のものといえるかという、直ちにこれに答えて否というとしている。それはいくら組織や制度を変へたらよいといった所が「それだけの仕事を負担する豪傑が出て来なければ駄目だからである」。「先ず社会を組織する一般の人々の思想、精神が變つて来ていなければ、殊に今日のごとき輿論政治の時代においては、容易に其制度なり仕組なりが變へられるものではない」「組織の改良よりも個人の改善をば、事の本質上、より根本的だと考へる者である。危機に遭遇すれば組織の改造も行はれ、その新組織が長所のみを発揮するが、気分が、弛んでくると、金のある者は贅沢もしたくなり、一生懸命に国家のために働くことも馬鹿らしくなつて崩れてくるかもしれない。」「人間は能く境遇を造ると同時に、境遇が又個人を造るという」「私は人普一倍、経済の人心におよぼす影響の甚大なることを認めつつある者の一人で、其点に於いては私は19世紀の最大思想家の一人たるカール・マルクスに負う所が少くない」とし、マルクスについても述べているが、彼に似た思想は古く東洋にもあるとし、「恒産なくして恒心あるは、惟士のみ能くするを為す」「茲に恒産なくんば因つて恒心なしとあるのは、之を言ひ換ふれば経済を改善しなければ道德は進まぬということなので、さうして之が所謂経済的社会觀の根本精神の適用なのである」「如何に社会の制度や組織が變つたとて、到底理想の社会が實現することは出来ぬと同時に、そういう人間さへ輩出するならば縦ひ社会の制度組織は今日のままで有ろうとも、確かに立派な社会を實現することが出来て貧乏根絶という如き問題も直ちに解決されて仕舞うのである。此意味に於いて、社会一切の問題は皆人の問題である」「問題を人に歸するに至らば私の議論は既に社会問題解決の第3策を終へて、正に第1策に入つた訳である」「其心掛とは、口で言へば極めて簡単なことで、即ち先づこれを消費者について言へば各個人が無用の贅沢をやめるといふ事只其れだけのことである。私がさきに、富者の奢侈廃止を以て貧乏根治の第1策としたのは、これがためである。」「『貧乏物語』は貧乏人に読んで貰うよりも実は金持に読んで貰いたいのであつた。」「何を以て人間としての理想生活とするかについては人のみる所で必ずしも同じではない。人間としての理想生活とは、之を分

析していへば吾々が自分の肉体的生活・智能的生活及び道徳的生活の向上発展を計り——換言すれば吾々自身が其の肉体、智能及び靈魂の健康を維持しその發育を助長し——進んでは自分以外の他の人々の肉体的生活・智能的生活及び道徳的生活の向上発展を計るための生活が即ちそれである」「無益に天下の食物を消費することを名づけて贅沢と請い、一切之を排斥せんとするものである」「自動車に乗るが如きことも、之を贅沢として排斥せんとするのではなく、其の人の職業、事業の性質に依っては、終日東西に奔走する必要があるものが有ろう。その場合に若し自動車の利用が、其人の時間を節約し天下の為により多くの仕事をなし得る所以となるのであれば、自動車に乗るもまた必要であって贅沢では無い」。贅沢と必要との區別を強調し、儉約論は貧乏人に向って説くべきではなく、主として金持に対して説くべきだとする。河上は財産でも身体でも余り太りすぎてはどうせろくなことはないとして、アメリカの生命保険会社が1885～1908年間の資料によると、平均より太っている者の死亡率が高く、とくに高齢者でこの傾向が強く、やせすぎている方がむしろ安全だとしている。贅沢を廃止するのは勿論であるが富者はその財をもって公に奉ずる覚悟が無ければならぬとしている。「私の話は既に消費者責任論より生産者責任論に移った訳である」といい、河上は金儲けのために事を經營することや金儲が悪いといっているのではない。競争についても否認するのではない。同業者より安くて善い品物であり儲けた金を真実社会の為に事業そのものの発展のためをはかれば差支はないといっている。いくら財産をつくっても之を一身一家の奢侈贅沢には使はない筈ともいう。そうすれば一切の社会問題は円満に解決され、始めて実業と倫理との調和があり、経済と道徳との一致があり、これによって漸く二重生活の矛盾より脱することが出来るとする。「若し夫れ利己といひ利他といふも畢竟は一のみ」「私は生産者の責任よりも消費者の責任を強調し、一般消費者の責任よりも特に富者の責任を力説したのである。併し富者も貧者も消費者も生産者も互に相まって各其責任を全うするに至らなければ、完全に理想的なる経済状態を実現するを得ざるこというまでもなきことである」「私が貧乏退治の第1策とは以上のごときものである」。消費者として生産者としての各個人の責任をのべひいて経済と道徳の一致を説いた。最後に世界の平和について一言している。「英独二国の不和の根本原因は経済上における利害の対立である。両国は製品輸出の競争時代を経て資本輸出の競争時代に入ったのがそもそも不和の根元である」。かかる資本主義経済の発展過程を述べているのが注目される。「英国の富豪及至資本家が消費者として将た生産者としての真の責任を自覚にするに至るならば遂に国内における社会問題を平和に解決し得るのみならず、又世界の平和も維持しうるに至るで有ろう」「之を以て考ふるに、畢竟一身を修め一家を斉ふるは、国を治め天下を平かにする所以である」『大学にいふ、「古の明徳を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其国を治む。其国を治めんと欲する者は、先づ其国を治む。其国を治めんと欲する者は、先づ其家を斉う。其家を斉へんと欲する者は、先づ其の身を修む。身修まって後家斉ひ、家斉ふて後国治まり、国治まって後天下平かなり。天子より以て庶民に至るまで、一に是皆身を修むるを以て本と為す。其本乱れて末治まる者否じ矣』と。「嗚呼、大学の首章、誦し来らば語に尽く千金、余又何をか言はん。筆

を停めて悠然たることを良久し。」と結んでいる。時に12月26日に終了している。

なお、附録としてロイド・ジョージについて述べている。ロイド・ジョージが1909年、大蔵大臣の時に増税案について有名な大演説をしたが、最後の一節に「新たに徴収される金は、第一に我国の海岸を何人にも侵されないように保証するために費されるべきものである（国防費）。同時に、国内での不当な困窮を救済するのみでなく、更にこれを予防するために徴収するのである。国防も大切であるが、我国をしていやが上にも善き国にして凡ての人に向って、又凡ての人によって守護するだけの値打ある国たらしめることが同様に緊要である。此度の費用はこれら二つの目的に使うため、このためにのみ此度の政府の計画は是認せらるる訳である」としている。彼は後に総理大臣となった。

「貧乏物語」の内容を私なりに原書にそって要約したが、現在の時点で大正5・6年当時の書を批判することは余り重要ではないと考える。その時期の経済学なり社会思潮、社会の実状を理解した上でのものでなければならない。

VIII 結びにかえて

以上、「貧乏物語」を中心に河上肇の人間像なり内容を見てきた。貧困の課題を思想的なものと経済的・倫理的問題として多くの人々に認識させ共感を得られたのである。第2に貧困問題を国民生活一般として把握したこと。第3に貧困を西洋的な経済的合理的なものと東洋的な倫理的・人間性の混合としとらえる試みをしたこと。第4は貧乏を経済的研究を中心にしながら人間的な課題、失業なり貧困は人ごとではなく自分にいつふりかかってくるかを痛感させたことである。第5に貧乏についての経済学的・科学的見方といふよりも思想的な面から接近に重きをおいていることである。貧乏なり失業についての経済的考え方、見方は基本的には二つの方法がある。一つは個人的な見方でそれはあくまでも個人の心掛、怠惰、浪費等によりひきおこされるもので、個人の心がけなり自立等により良くなるというもの。第二は社会、経済、政治のしくみによりもたらされるのであるとする。これには(イ) 改良主義的な修正によるものと、(ロ) 全体のしくみを一挙に改へる革命的立場である。要するに修正資本主義か社会主義かということである。例へばアメリカでの世界恐慌時の対策が、従来の個人的な考え方から社会責任というか国家での改良的なものに変化した点がみられる。「貧乏物語」は上、中、下編のうち下編がとくに批判の対象となったが、大正8年1月1日の大阪朝日新聞に河上は「或医者の独語」を書き、ある程度は病気（社会の）を根治するには手術もせざるを得ないと改造を主張している。しかし、また同年12月1日「実業之世界」のアンケート「生活難を如何に救済すべきか」への回答として「多数の人々の生活難を救うには、要するに豊富なる生活をなせる人数の人に多少の犠牲を要求することなくしては別に、妙案これなかるべしと存じ候。」と依然として「貧乏物語」の考えを述べている。

「貧乏物語」を執筆した時期の河上は貧乏について西欧の資料を中心にして統計的・実証的な面と、個人主義・自由主義的な経済学にかわる経済学として社会的改良、社会政策的な経済

学と、マルクス経済学の一部をもとり入れようとする社会主義的方向の試みの面がうかがえる。要するに「貧乏物語」の段階では経済と倫理、経済と道德との関係を主張している色彩がかなり濃厚であったといえる。河上は明治38年8月の「財界」に論文を書き将来の三大問題とし「余輩は本邦経済界の将来を觀測して三大問題の解決すべきものがあると思う。その一は農業者対商工業者の問題なり、その二は資本家対労働者の問題なり、その三は男子対女子の問題なり。」と述べているのが注目される。今日では「豊かな社会」「中流意識化」等が述べられている。反面、土地・住宅問題とか、ローン、カード制等による「見えざる貧困」「新しい貧困」等がいわれている。かゝる時代であるからこそ、今一度「貧乏物語」を読み、考えることが必要な時期と思う。本年はこの物語刊行後70年目にあたる。なお、文中に書いた方々の敬稱は一切省略した。また引用文中に・・印等をつけたのは筆者である。

(注1) 京大辞職と大学の自治について 佐々木 惣一(元京大教授で憲法学者)

紙数の関係で佐々木惣一が「疎林」(昭和22年11月号)に書いたものを筆者が要約しとりまとめたものである。佐々木は次のように述べている。京大総長と経済学部長等で河上の辞職を行うことを東京で決め、河上に辞表の提出を求めるとい話をきいた。教授の罷免は当該学部の教授会の同意を得なくてはならぬことは運用上の原則であった。それがなされぬのは京大全体のことであるから法学部は緊急教授会を開き、この問題は経済学部教授会の同意をうべきだと決議をした。総長はこれをいれ経済学部教授会に問うことにした。経済学部教授会は「総長が河上教授の辞職要求の理由に同意するものではないが、自発的辞職を要求することには異をいうものではない」とよく解することが出来ない決議をした。河上は教授会を経たのであればと辞職を決意した。「私の見る所では河上氏は学者として立つことによって其の天分を完うすべきである。河上君よ益々自愛してくれたまえ」と佐々木は述べている。この事件に対し世間の一般新聞は非常に重大事としてとりあげた。大学の自治はまもなく滝川事件と移り、法学部の多くの教授は辞職して抵抗したのである。佐々木自身も辞職したのはいうまでもない。

(注2) 「第二貧乏物語」の目次示す。

- | | |
|-----------------------|---------------------------------------|
| 1) まえおき | 8) 剰余価値 |
| 2) 弁証法的唯物論(総説, 細論) | 9) 剰余価値の出所 |
| 3) 唯物史観 | 10) 商品としての労働力 |
| 4) 唯物史観から資本主義的社会的解剖へ | 11) 労働時間延長, 賃金値下げ, 産業合理化——労働能率の推進, 等々 |
| 5) 驚くべき貧富の懸隔 | |
| 6) 資本主義社会の細胞としての商品の分析 | 12) 資本主義の行き詰り——その必然的×× |
| 7) 価値の実体としての社会的労働 | |

(附録の1) 共産主義への展望

(附録の2) 世界資本主義の危機の増大とソヴェート聯邦における社会主義的建設の加速的勃興(翻訳)

(1987・9・16)